

十人十色のフォトストーリー

Alt-Focus GRAPH



2015年5月 第5号

「初参加から7年。 どんな変化がありましたか？」

2008年12月に第1回受講生作品展が開催されて、毎年参加されている方がいます。作品展を通してどう表現の幅を広げてくれたのでしょうか。思い出を振り返っていただきました。

参加者（写真左から）

仁部和子さん：一眼レフを購入するも箱に入ったままの状態を脱すべく、検索でアルトフォーカス基礎講座を知り2008年に参加。

新井真理子さん：一眼レフを使い始めた2007年に基礎講座に参加。アルトフォーカス創世紀(?)を知るメンバーの一人。

帆谷由美子さん：きっかけは2008年の写真表現の講座。受講前から一眼レフで撮っていたものの、展示経験はなかった。



最初はただ「おもしろそう」！それだけ

—— 初参加を決めたときのこと、覚えていますか？

仁部 基礎講座に参加した直後、第1回の受講生作品展をやると知り、おもしろそうだから参加してみようかと…。

帆谷 あ、私もそんな感じです。

仁部 講座受けたばかりで写真もないのにですよ（笑）

帆谷 作品展と聞いたときに「あ、なんか楽しそう、やったことないし」と思いました。その頃って撮影が楽しくていっぱい撮ってたし、振り返るとすごくまぶしい時代（笑）。だから写真に関係ある珍しいことができるなら、やらなくちゃと飛びついた感じです。

新井 みんな初めての作品展だったよね。（講座に参

加して）1年と3～4か月で写真もそんなにとってない。でも写真に関することをみんなと一緒に楽しく、参加できればいいなって。

—— 皆さん、展示も初めてでしたか？

一同 はい。

帆谷 初めてだから（先生が）ある程度助けてくれるのかなと思ったら「自分で試行錯誤して考えてやってみなさい」と、講座と同じ方針でした（笑）。自分でもなんとか頑張って、振り返ればそれがよかったかな。

仁部 楽しかったですよ。プリント用紙を買ってくるということにしても、普段はL版なのにA4を買っている誇らしげな気持ちとかね（笑）。緊張感はあるんですけど。

新井 何しろピントが合った写真を探すのが大変でし

た。近づくにつれ、果たして自分がこんな写真を出していいのかなという不安も出てきました。人に見せるってどういう感じかなとか、人に見せるのにこんな写真でいいのかなって自問自答して。

—— 連続参加は初回の充実感があってこそ？

帆谷 本当にすごく楽しくて。終わった後の充実感があって、みんなテンションがいつまでも高くって。

新井 やりつくした、燃え尽きた感じ。しばらく憔悴してた。1回目はやっぱりすごかったですよ。

帆谷 そう。すぐに、また絶対出すって思った。

仁部 最近は作品展参加募集のメールが来ると、参加者リストの一番乗りになるのもこそばゆいから、少し寝かせて参加の返信したりするんですけど。

一同（笑）

見られることを意識した後の難しさ

— 2回目以降で出す作品も変わってきましたか？

帆谷 第1回は全部、大好きなアメリカだったんですけど、第2回はイメージを固定されたくなくて人物や猫、星空の写真+アメリカの写真2枚を出しました。

新井 あ、その気持ちはわかる！

帆谷 それも3回目くらいまでかな。で、巡り巡って、やっぱり私はアメリカを出したいんだって、自分に正直になってみました（笑）。

新井 第1回は本当に好きなもの5枚という感じでした。第2回からは、眺めてもらったときになんとなく関連ある5枚に見えることを意識するようになりました。

仁部 最初は人がどういう写真出すのかもイメージできなかったから、ポンと出せちゃったと思うんですね。回を重ね、みんなの作品を知るにつれ、ちょっと怖くなってきた。私もがんばらなくちゃと思う。

帆谷 そうそう。先生に「7年連続の帆谷さんですよ」みたいに紹介されると、ただ回を重ねているだけののにプレッシャーが…（笑）。

新井 ここ数年、初参加の方の熱意をすごく感じるんです。最近ちょっと撮ってない自分がいて、夢中になって撮れるキラキラしたものを自分でも探したいとか、ちょっと違う写真に挑戦したいとか、いい刺激をもらいますね。

出し続けられるそのココロは？

仁部 私も2回目の頃はおもしろくて楽しくて、何でも写していた時代。そういう時期ってあるのよね。

新井 実は第6回と7回は参加するかどうかちょっと考えたんです。全然写真を撮ってなかったので「こんなテンションで申し訳ないなあ」って思ってしまって



【左】新井さんの第1回出品作品「雨のいたずら」。写真をさかさまにして、表現のおもしろさに開眼した記念すべき1枚。



【右】新井さんの第1回出品作品「I love Beetle」。「来場者から“こういう切り取り方ってなかなかできないんだよね”と言われてうれしかった」

ね。第7回は去年撮った尾瀬1枚に、前に撮った4枚の写真を合わせて「空」をテーマの組み写真にしました。

帆谷 えー、そうなんだ。あの作品群を見たら、新井さん、去年はいっぱい空を撮ったんだなって思いますよよね。

新井 空はいつか出したいテーマだったからいい機会だったんですけどね。その時その時に撮った写真+1

枚を組んで出せるようになったのも、これまでの積み重ねかなと。

帆谷 私の場合はまず、パソコンの「アメリカ」というフォルダを探すところから準備が始まる。

新井 そういうテーマがあるのがうらやましい！自分が撮りたいのがあると、もっと続けやすいのかなあと思うもの。

仁部 常にテーマを持ちたいと思ってもね。好奇心に

つられていろいろ興味も変わるし。自分で納得いく写真が撮りたいと思って続けるのがいいと思いますね、今度こそって。それが一番かもしれない。納得できないから続けられるんですよ。

帆谷 私も参加を迷ったことはないなあ。毎回「5枚出す」って決めているから。思うのは、7回連続で出せたというのは、生活とか仕事とか、自分が出せる環境にあったということだったんだと思います。自分の意思だけでなく、そういう要因も大きいですよ。

参加して広がる表現の世界

仁部 作品展のメンバーも1年に1回目黒の会場で会うのを7回も続けていて、ご縁ですね。

新井 第1回からのメンバーの写真はずっと拝見しているので、仁部さんや帆谷さんは今年は何かなあというのも楽しみです。

帆谷 第6回に甥っ子のサッカー、紅葉、3枚のアメリカの写真を出したら、「サッカー」と「紅葉」に質問が集中しまして。違うタイプの写真を出したときの反応がうれしいような、ちょっとさびしいような（笑）。

仁部 第7回は孫の写真を出したんですが悩みましたね。身内の写真を出していいのかなって。その時、帆谷さんが甥っ子さんの写真を出してたのを思い出したんです。

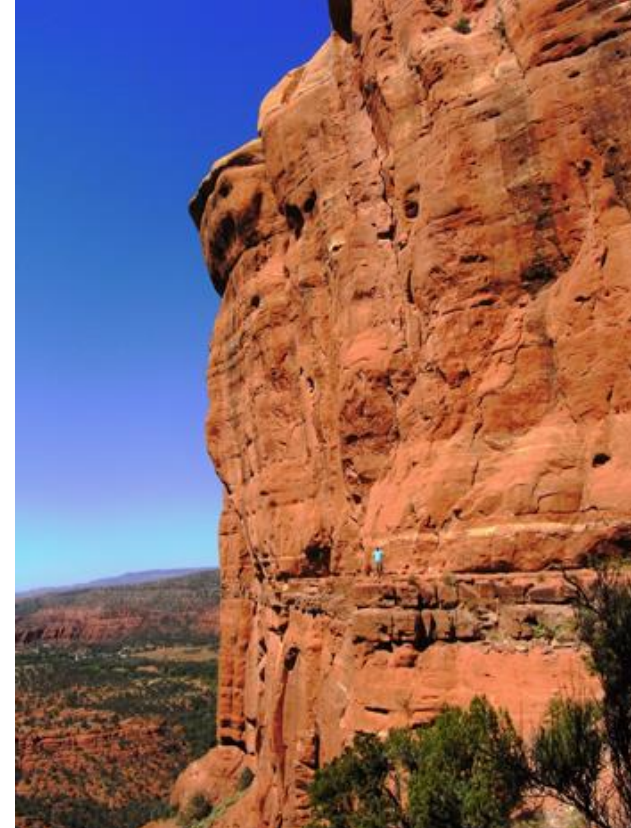
帆谷 あれは甥っ子が二十歳で成人式、その年のテーマ部門のお題と合っていたから・・・。

仁部 やはりテーマが感じられましたよ。私も0～1歳の成長の神秘的なところを撮りたいと思っていたから、「身内でも撮りたいテーマで撮ればいい」と背中を押してもらえたんです。

新井 他の出品者の作品に触れて興味がわくことがありますよね。以前、A3ノビで人物のポートレートを5枚出していた方がいて、「いつか人を撮ってみたい」



【左】帆谷さんの第3回出品作品「都会のゆく末」。フォトコンテストにも出した作品。「タイトルも悩んだ末決めました」
【右】帆谷さんの第7回出品作品「直登」。「まさに私の好きな“アメリカ”が凝縮されてる1枚」



という思いにつながりました。

変わらないのは、タイトルづけの苦しみ！？

— 初参加から変わらない大変さってありますか？

一同 タイトル！

仁部 作品選びが終わってタイトルまで来るとほっとします。まず、いろいろ書きだします。そしてちょっ

と、いやー晩考えます。

帆谷 私も寝かせる。夜中に考えたタイトルとか危険！朝見てぞっとしたり（笑）。タイトルが作品より目立たないようにしたいと思うんです。一生懸命考えるけど、そこだけに注目してほしいくないという気持ちもあります。

新井 組み写真でも別々に（タイトルを）つけたほうがわかりやすいのか、トータルでひとつにしたほうがいいのかとか。今年も決めたもののほかに、バラバラ

のタイトルを考えたりしていました。

帆谷 私は完全にネットを見ながら考える。検索したり、何かヒントないかなあと…。

新井 私も、候補が浮かんできて、ちょっとネットで検索してどうかなあと考えたり…。

帆谷 そうそう、それで5枚並べたときどう見えるのかとか…考えます。

—— 最近落ち着いたとか言いながら、十分テンション高くやってるじゃないですか！（笑）

帆谷 いえいえ、必死なんです！そこちょっと大事なんで（笑）。

仁部 ホント、最後にタイトルを先生に送信するまで迷って迷って、エイって。

これからは。これからも。

—— 最後に今後の抱負をお聞かせください。

新井 全く違うタイプのものを出してみたいです。もっと撮りにいかないと…！

仁部 物語のある写真、写ってないものを表せる写真を撮れるといいなあとと思います。第7回で出した、渡良瀬遊水池の写真は、昔、足尾銅山の鉱毒事件があったところ。それが今は平和な風景が広がっていていいなという思いを込めて撮りました。

目に見えない思いが見る人に伝わり、誰かが「いいな」って言うってくれたらうれしいですね。

帆谷 私は、アメリカを出したいということの他に、1年間興味を持っていたことの「集大成」を作品展に

出すみたいなところがあります。第6回の「サッカー」はそんな1枚でした。これからもそういう選び方をしていくのかなとは思いますが。

仁部 また次も参加しないと。今度は遠慮せずに参加申し込みのメールを送信しようと思います（笑）。

—— 7年間の振り返り、あつという間の濃厚なトークでした。来年も写真展でお会いできることを楽しみにしています。

取材・文＝山本玲子

【左】仁部さんの第2回出品作品「新入生」。「大きな桜の木の下で、ぶかぶかの制服を着た新入生がかわいくて思わず撮りました」

【右】仁部さんの第7回出品作品「ぎらり、ぎらぎら」。「この渡良瀬遊水池からは昔の公害は想像できない。“公害はるか”ってタイトルにしようかとも思ったんですよ」



季節のノート

～なかくぼくにこのフォト&ショートエッセイ Vol.1～



春を探しに

うらかな陽射しの降りそそぐ日には
使い慣れたカメラを下げた散歩に出かけよう
桜並木の続く川沿いの土手は
小さな春を見つけるには最適な場所だ

さやさやと流れる水辺には うす紫色の野の花
カモの親子が ゆったりと水面に浮かび
白鷺は優雅な立ち姿でその羽を休めている

少年たちは河原でキャッチボール
その傍らで からし菜摘みに熱中するおばあちゃんと孫
対岸に目をやれば
ひなたぼっこしているカップルや
糸を垂れる釣り人たちの時間は止まったままだ

レンズの向こうには
思い思いの春を楽しむ幸せな景色
私の心も春色に染まったみたいだ
少し風が冷たくなってきた
河原で見つけた翡翠色の小石をポケットに忍ばせて
さあ そろそろ帰ろう

写真・文 = なかくぼくにこ

2008年よりアルトフォーカスに参加。芸術的あるいは創造的な視点を大切にしながら、最近では人物やヌード写真にも挑戦中。野外撮影の主なフィールドは八ヶ岳南麓。

あの受講生に会いたい

取材・撮影を担当するのも受講生。毎号、多くの受講生の中からおひとりずつ、ご自身の楽しい写真ライフについてお話をうかがいます。

Vol.5 高橋 恵子さん

Profile Keiko Takahashi

アルトフォーカスとの出会いは2009年の「三脚講座」。以来、コンテストや写真展で、様々な表情の鳥の写真で楽しませてくださる。鳥パトロール(?)に出かける日々のお散歩にも400ミリの望遠ズームレンズつき一眼レフは欠かせない。鳥のほか好きな被写体は、花や自然の風景。



「熱視線」 鳥たちの鋭い(?)視線にこちらも目が釘付けに。高橋さんが受講生作品展に初参加されたときの1枚。



今年のアルトフォーカス受講生作品展で展示された高橋さんのフォトブック「白岡 四季の野鳥散歩」。鳥の種類もさることながら、鳥の飛ぶ姿から一瞬の面白い仕種などがつまった素晴らしい作品集でした。どうしたらここまでテーマを極めた作品集を作れるのだろう。その秘訣をうかがいました。

庭に来る鳥を撮りたくて

—— もともと鳥に興味がおありだったのでしょうか？

高橋 いえ、そういうわけではなかったんですよ。子供が大きくなって目が外に行くようになって、庭に綺麗な鳥が来るなあって気づき始めて。最初はコンデジで撮ってたんですけど鳥には近づけないから小さくしか写せないし、思ったように撮れませんよね。もっと大きくもっと綺麗に・・・と欲が出てきて、それが一眼レフを始めるきっかけになりました。また健康のために自転車ですり遠出をするようになり、「あの鳥は何だろう」と調べたり聞いたりしているうちに知ってる鳥の種類も増えていったんですね。

—スズメかカラスくらいしかわからない私には想像つかない世界です（笑）

高橋 結構気をつけて見ていると、身近にもいろんな鳥が来るんですよ。鳥図鑑で調べたりもしますが、7～8年前から撮影した鳥の写真を載せたブログを始めまして。名前がわからない鳥の写真を載せると、教えてくれる方がいたりして、情報交換の場にもなっています。「野鳥の会」にも入りました。

そう差し出されたのは、「BIRDER」という冊子と、鳥の撮影地が満載の情報誌。拝見させていただくと関東近県でも聞いたことのない地名がズラリ。さぞ、ディープな野鳥ライフに傾倒されているのかと思いきや、鳥の生態や出現スポットを収集する場としてバランスよく活用されているご様子。

クイズ 君の名は？

高橋さん撮影のお気に入りの鳥の写真をエピソードつきで語っていただきました。かわいらしい鳥の名前、いくつわかりますか？（答えは次のページ）



—「野鳥の会」ってどんな感じですか？

いろいろな鳥をたくさん見ることが主旨なので、どんな時にどんなところで見られるか勉強になるけれど、撮影が目的なのは私くらいですね（笑）。後日改めてそこに出向いて撮影したりします。撮影に行くときはだいたい一人です。渡良瀬遊水池など車を走らせて撮影に行くこともありますが、庭に来る鳥や近場の散歩で出会う鳥を撮ることがほとんどです。自転車で買い物に出かけるときなども一眼レフを持って行きます。

—①はおなじみの鳥ですがユーモラスですね！

高橋 でしょ！お気に入りです。自宅の2階から電線にとまったところを撮ったんです。②はよく庭に来ていて、鳥に興味を持つきっかけになりました。背中に白い団子を背負っているみたいで「ダンゴジョイ」という地域もあるんですよ。③は羽を広げるとクジャクみたいでとてもきれいです。

—④は、ひまわりの種をちょうどくちばしにはさんだ、素晴らしいシャッターチャンスですね？背中の羽の色と枯れたひまわりの色がイイ感じに合っていて好きです。

高橋 この鳥はひまわりの種が好物で、多い時は一度に5羽来ました。鳥が来るように、ひまわりを植えたり、木にエサをつけたりします。

—なるほどー！鳥への愛を感じます！

思うように撮れないが、撮れる確率を上げることはできる

—鳥に限らず動物を撮ることは難しいですよね。どうしたらいい写真を撮れると思われますか？

高橋 鳥との出会いは偶然や運だから、なかなか撮れるものじゃないんですよ。だから基本は地元だなんて（笑）。撮る機会を増やし、鳥について詳しくなる、

例えばどういう時期にどんな写真が撮れるかが分かれば、偶然に出くわす確率が上がると思います。

—撮りたいなと思っていると、不思議と出会えることってありませんか？

高橋 あります！やっぱり年がら年中鳥を撮りたいって思っていると「鳥運」ていうのかしら、引き寄せてくれるのかもしれませんが（笑）

表面的な特徴だけでなく、好物は何か、渡り鳥ならいつ撮影地にやってくるのか、季節の移り変わりや羽の色の変化etc…。被写体について多面的に知ることが、すばらしい写真のベースになっていると感じました。

—高橋さんをひきつける鳥の魅力ってどこにあるのでしょうか？

高橋 小さい体に秘めたパワーでしょうか。私達が目にする鳥のほとんどは渡り鳥で、たとえばベトナムへ渡る鳥もいれば、はるかシベリアから白岡の田んぼを目指して来る鳥もいます。この小さな体のどこにそんなパワーがあるんだろう、鳥の渡りってすごいなと感じます。



400ミリの望遠レンズつき一眼レフを片手に、川沿いのお散歩コースで。

一方、わざわざベトナムまで行かなくても、もう少し近場の九州くらいで越冬すればいいのにと、野生の性に少し哀しくなったりもするのです。

—これからどんな作品作りをしていきたいですか？

高橋 鳥ということでは「掛川花鳥園」というさまざまな鳥がいるところで、とくにふくろうを撮りたいですね。あとは北海道の流氷にやってくるオオワシやオジロワシの群れも撮ってみたいです。

—ところで高橋さん、鳥の写真だけではなく、フォトコンテストで鎌倉の梅の写真で入選されています。可憐な梅のたたくまいに引き込まれました！

高橋 鳥を多く撮っていますが、自然全般、風景を綺麗に撮りたいなという気持ちもあり、撮影ツアーにも時々参加します。でも以前、雨晴海岸の撮影ツアーに行ったんですが、景色を撮ろうとしてたら鳥が視界に入ってきて……。風景に鳥を見つけると、ついそっちを撮り始めたりしちゃうんです（笑）。花も好きなんですけど、どうしても図鑑みたいな写真になってしまっただけで作品にならないのが気になっています。

—いえいえ、どう見ても「作品」にしか見えません（笑）

いい写真を撮るには、被写体への興味、観察、そして愛情が大切なのだ！と気付かされたインタビューでした。写真展で披露いただいた「白岡の野鳥」シリーズのフォトブック第2弾、作られたらまたぜひ拝見したいです。楽しい野鳥と写真のお話、ありがとうございました。



「そっと、ほころんで」鎌倉 寶戒寺にて。第5回フォトコンテスト入選作品。

高橋さんへメッセージ

散歩道の木にとまる鳥の名前や特徴をさらっと説明していただき、知識の豊富さに感動しました。私も身近な鳥にもう少し目を向けてみたいと思います。

クイズ 君の名は？（前ページより）

答え ① ツバメ ② ジョウビタキ
③ タゲリ ④ カワラヒワ

取材・文＝山本玲子 撮影＝田口裕子

ミンガラーバー！ from Yangon ～ 桂川融己のミャンマー便り～

連載第3回 ミャンマーの大衆料理

ミンガラーバー、ヤンゴン在住の桂川です。

「ミャンマーではどんな料理があるの?」「どんな料理が美味しいの?」

「普段は何を食べているの?」という声をたくさん聞きます。

そんなわけで今回はミャンマーの料理特集です。

ミャンマーの料理は、麺類とお米類が中心です。

【左】 代表的なお米料理は、タミンジョー（タミン＝お米、ジョー＝焼く・炒める）。日本でいう炒飯です。味もかなり近く、みんなよく食べます。

【右上】 タミンジョーとよく一緒に食べるのがラペットウ（お茶の葉のサラダ）。お茶の葉の苦みと豆の塩味がいい感じに混ざります。サラダ感覚でも食べられ、ご飯のお供にもなります。

【右下】 そして有名なのはカレー（ミャンマー語でヒン）いくつかを選び、みんなでシェアするのが一般的。魚や鶏、豚などそれぞれが選びます。写真のカレーの具は山羊の脳です。柔らかく、しっかりした味です。





麺類も人気があります。麺の種類は豊富ですが、ベースは米粉。麺のことをミャンマー語でカオスエといいます。

【左】 オンノカオスエ（ココナッツベースのスープと麺）：ベースとなるスープの塩辛い中に、ココナッツの甘みが広がり癖になる味です。

【中】 シャンカオスエ（シャン州の名物）：私は、この麺が一番好きです！日本人の口に合います。

お店によって、少しピリ辛だったり、甘口だったりと微妙に違いがあり、色んなお店で食べ比べて欲しいです。

【右】 ナンジッター（サラダ的な麺）：汁のない麺。サラダ感覚で食べられます。太麺で噛み応えがしっかりあって、ピリ辛です。私のお気に入りの麺のひとつです！



こちらはミャンマー第2の都市マンダレーにあるお店。食べたいおかずを選ぶシステムです。ご飯は食べ放題でいくらでもおかわりができます。お値段もお手頃で、どれだけお腹一杯食べてもひとり500円を超えることはまずありません。



【左】 ヤンゴンノ市場には、色とりどりの野菜や果物が並んでいて、食材は充実しています。

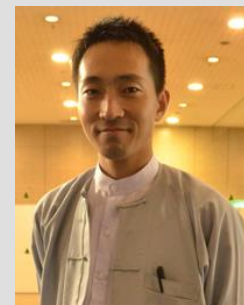
【上】 市場で売られている虫。私は食べようと思ったことはないですが(笑)、栄養価はかなり高いようです。

数あるミャンマー料理の中でも私のオススメはやはり麺類！もしミャンマーに来られる際は「シャンカオスエ」と「ナンジットー」はぜひ試してみてください！きっと癖になりますよ！



プロフィール：桂川 融己

1984年2月生まれ。自然豊かな岐阜県下呂市出身。日本生命保険相互会社にて7年9ヶ月の勤務の後、退職し現在はミャンマーに渡り、現地での人材紹介業に従事。渡航直前の2013年11月、アルトフォーカスの「はじめての一眼レフ」を受講。ブログ「From Yangon」にて写真や現地的情報を発信中。 <http://melt-myself.com/>



ヤンゴン1の繁華街19番通りには串焼きの屋台が建ち並び、毎晩、賑わっています。串を選び、焼いて席まで運んでもらいます。野菜やお肉、海鮮まで色々あってオススメです。

講師・秋野深からのお知らせ

■7月～8月に東京・神保町で個展開催

7月13日～8月2日に東京・神保町のギャラリー&カフェ「クラインブルー」にて個展を開催します。昨秋のタシケント国際フォトビエンナーレへの出品作品を中心に、水が描く情景を抽象的に表現した自然写真の展示になります。過去の国内の展示で発表してきたものとは違うタイプの作品です。

会期中には撮影のエピソードや作品にいたる思いを語るギャラリートークを企画予定です。個展の詳細はウェブサイト、フェイスブックページで発表します。

<https://www.facebook.com/jinakinophoto>

★会場：クラインブルー <http://kleinblue.jp/>

■ウズベキスタンの旅番組「TV Sayohat」に出演

ウズベキスタン西部の世界遺産の街ヒバで地元のテレビ局制作の旅番組「TV Sayohat (TV Journey)」に出演しました。

日本人写真家としての視点で、ヒバの歴史・建築・文化の魅力についてインタビューを受けました。

制作：ホレズムTV

オンエア：4月11日(土)20:00～



■ディノスショッピングサイトで連載中

カタログ通販ディノスのオンラインショッピングサイトにて「写真家・秋野深のやさしい旅のフォトレッスン」を連載中です。早いもので連載開始から1年半、レッスンももうすぐ20になります。カメラの種類を問わず旅行が大好きな方々向けに、旅の様々なシーンを想定したワンポイントレッスンです。

★レッスン19:風景の雄大さを上手に表現しよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson19/

★レッスン18:桜とその場の風情を上手に表現しよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson18/

★レッスン17:背景に配慮して桜の色彩を上手に表現しよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson17/

★レッスン16:旅先で見つけた雰囲気の良いお店を上手に撮影しよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson16/

写真教室アルトフォーカス

写真家・秋野深による個人運営の写真教室です。都内にて、主に一眼レフ、ミラーレス一眼ユーザー向けの講座、撮影会などを開催しています。土日または平日夜開催で、テーマ別に1～3回で終了する講座が中心です。

ウェブサイト：<http://www.alt-focus.com>

Facebook：<https://www.facebook.com/altfocusphoto>

お問合せ：alt-focus@alt-focus.com

シニアのための写真教室アルトプリズム

2015年1月からスタートしたシニアのための写真教室です。平日午前中～夕方開催で、基礎からゆっくりと進めていきます。

ウェブサイト：<http://www.alt-prism.com>

お問合せ：ap@alt-prism.com

Alt-Focus GRAPH 第5号スタッフ

山本玲子 (取材・執筆)

7回連続出品者の皆さんは息もピッタリ。連続出品の気負いはないとおっしゃいつつ、さらっと出てくる言葉は重みがあって続けているからこそその財産と思いました。

田口裕子 (撮影)

桜並木が続く散歩道を高橋さんが案内してくれました。早春のぽかぽか陽気のなか、穏やかな時間が流れていました。私もカメラを持って散歩したい気持ちになりました。

山田祥子 (レイアウト)

今回から制作スタッフとして参加させて頂くことになりました。キラキラ光る積極的な皆さんから刺激を受けて、最近カメラを持ち歩く機会が増えました。

秋野深 (監修)

AFグラフも2年目に突入。アルトフォーカスも今秋で10年目。立ち上げ当初の初心を思い出しつつも、過去にはしばらく、マイペースで進みます。

表紙写真：「Macro de Micro 1301」大川幸治

「見る人に『?』と思わせたかった」という遊び心溢れる実験的作品。ビー玉と色紙にライトをあてて創り出した世界は鮮やかで幻想的。

Alt-Focus GRAPH 第5号
発行：写真教室アルトフォーカス
発行日：2015年5月30日

<http://www.alt-focus.com>
alt-focus@alt-focus.com